

軍事フレームに基づくメディカル・メタファーの論考

荒川洋平

キーワード：メタファー、医学、戦争、軍事フレーム、非戦

1. はじめに

本研究は戦争・軍事のフレームに基づいて生み出される、医学分野のメタファーに関して考察を行う。メタファーの分類に際しては、Lakoff & Johnson (1980) による概念メタファー理論 (CMT: Cognitive Metaphor Theory)、Lakoff, Espenson & Schwartz (1991) のマスターメタファーリスト、および瀬戸 (1995) による認識の三角形理論を用いる。

本稿におけるメタファーとは、認知言語学における概念メタファーとメタファー表現の双方、すなわち「人間の認識におけるモト領域からサキ領域への写像行為およびそれに基づく個々の言語表現」を意味する。また Hodgkin (1985)、Harley (1993) などの先行研究に即し、本研究で扱う一連のメタファーを「メディカル・メタファー」と呼ぶ。¹⁾

本稿は医学・医療テキストの用例やその分析を考察した問題解決型の研究 (usage-based and problem-solving research) であり、当該分野に関する複眼的な整理を行った上で問題点を指摘し、かつ解決への視点を提示するものである。

2. メディカル・メタファーの分類

メディカル・メタファーは長い歴史を有し、マスターメタファーからの派生を含む、広い下位範疇を持つ²⁾。Coulehan (2003) は最も有力な (most prominent) メディカル・メタファーとして以下に挙げる3領域 (図1) を示し、それぞれにおいて病気・医師・患者がどのように見立てられているかを例文で引証している。まずこれらの概要と批判を検討し、次いで筆者の論点を付加する。

2.1. 親のメタファー

これは医師の規範、見解、行動などを親のそれら諸要素に見立てたメタファーである。Nie (1996: 1099) は西洋社会では一般に医師など苦痛や懊悩を癒す存在に対しては、親・技師・教師・船長などのメタファーが用いられる傾向があると論じており、Coulehan (op. cit.) の例示はこの連想と通底するものと考えられる。

(1) Thus the Chinese metaphor differs markedly from Western images of the healer as parent, technician, teacher, fighter, or captain of a ship.

Parental Metaphor (親のメタファー)	Parental Statements (「親」の引証)
DISEASE IS THE THREAT OR DANGER (病気を脅威または危機に見立てる)	言及なし
PHYSICIAN IS A LOVING PARENT (医師を子を愛する親に見立てる)	"She is too sick to know the truth." 「彼女は真実を知るには弱々しすぎる。」
PATIENT IS A CHILD (患者を子どもに見立てる)	"We don't want him to lose hope." 「我々は彼に希望を失ってほしくない。」
Engineering Metaphor (工学のメタファー)	Engineering Statements (「工学」の引証)
DISEASE IS MALFUNCTION (病気を故障に見立てる)	"He's in for a tune-up." 「彼は調整のため入院中だ。」
PHYSICIAN IS AN ENGINEER OR A TECHNICIAN (医師を技師または技術者に見立てる)	"Something's wrong, doc...you fix it." 「先生、何か調子が悪いんです...直してください。」
PATIENT IS A MACHINE (患者を機械に見立てる)	"We need to ream out your plumbing." 「我々は消化管の穴拡張をする必要があります。」
War Metaphor (戦争のメタファー)	War Statements (「戦争」の引証)
DISEASE IS AN ENEMY (病気を敵に見立てる)	"I treat all my patients aggressively..." 「私は自分の患者すべてを攻撃的に治す。」
PHYSICIAN IS A WARRIOR CAPTAIN (医師を指揮官に見立てる)	"He's a good fighter." 「あの医師は良き戦士だ。」
PATIENT IS A BATTLEGROUND (患者を戦場に見立てる)	"The war on cancer." 「ガンとの戦い」

図1 メディカル・メタファーの有力な3領域 (Coulehan 2003 を編集、筆者訳)

また一般に、子どもの病院体験は親に伴われるのが通例であるため、診察や治療を促す存在である親とそれらを実践する医師の間での役割的な親和性が働く、という推論も成り立つ。

しかし、医師を親に見立てるメタファーには、その固有性に関わる問題が存する。

親は職業ではなく、血縁あるいは法律上の立場である。ゆえに、個々の親のありようは各自の信念やそれぞれが置かれた環境に負うところが大きいため、モト領域としての共通項が掴みにくい。図1の例示は、これらのモト領域を仮に教師や上司に代えても解釈可能であり、親に固有かつ顕著な特色は見出し難い。

実際、親のメタファーは対立する概念同士の説明に用いられるほど幅が広いため、下位カテゴリーの設定なしには解釈が両極端に陥る可能性がある。例えば Nation-as-family metaphor が提唱されている Lakoff (1997) では、アメリカ政治における保守思想に対して「厳しい父親 (strict father)」のモデルを、リベラル思想に対して「慈しむ両親 (nurturant parents)」のモデルを採用して、対立軸双方の見立てに親の下位カテゴリーを適用している。図1の例示からは Coulehan (op. cit.) が後者のモデルを考えていることが推考できるが、このメタファーはモト-サキの領域間に共通項が多く、いずれの例文も新奇性・独創性に欠ける。本分野の中心的な研究書である Bleakley (2017: 55) においても、メディカル・メタファーにおける親メタファーの減少は指摘されている。

- (2) We are in the middle of such a sea change in medicine, where “paternalism” - the doctor is a father figure, the patient a child - is a longstanding, divisive metaphor disappearing from medicine [...].

2.2. 工学のメタファー

これは工学の構成要素である機械・機関の動作や状態を、医学・医療のありように写像したメタファーである。見立てとしての歴史は古く、18世紀のフランス語辞典である Académie française (1762: 65) に既に採録が見られる。

- (3) On dit figurément, que l'homme est une machine admirable. (We say figuratively that man is an admirable machine. 筆者訳)

また Lakoff, Espenson & Schwartz (op. cit.) はこれを「人々を機械に見立てる (PEOPLE ARE MACHINES)」のマスターメタファーとしている。

- (4) He's wound up tight as a spring; Fuel up with a breakfast, etc.

工学の見立てを受けることにより、医学に対して機械操作・設計・故障・点検などのアナロジーが働き、別領域から光を当てた知識の統合が図られる。しかし、このメタファーは医者が自らを人間でなく機械を扱う仕事と見なすため、快癒を促進するための患者-医者間の医療コミュニケーションが無視されがちになるという問題が存する (Diekema 1989: 20)。

- (5) Many patients complain about physicians who work as mechanics or technicians, ignoring the full human interaction that promotes patients' involvement with their healing.

また胃壁 (stomach wall)、口蓋 (roof of the mouth) などが示すように、見立てられる対象である人体内外の部位の多くは、パートノミーに基づく建築物の下位カテゴリーをモト領域とする。しかしそれらは動力を用いた駆動を必要条件とはしないために、機械を中心とする工学メタファーでは説明しきれない顕著な領域を残す。Coulehan (op. cit.) が「機械」でなく「工学」の文言を採用した背景に建築物のメタファーを包摂する意図があったか否かは明らかではないが、有力なメタファーとしての命名の妥当性には疑問が残る。筆者は機械のメタファー (machine metaphor) と建築のメタファー (architecture metaphor) を分離して論じた Lupton (1994) を支持し、建築学と機械工学の発展における時代差がメタファー形成における時代差にスライドした点を踏まえて、双方を包摂する適切な命名が必要であると考え。

2.3. 戦争のメタファー

これは、医療従事者による病気の治療を、敵との戦いに見立てるメタファーである。Slobod & Fuks (2012) によると、このメタファーの初出は17世紀中盤であり、先行研究の数において他の2分野を凌駕している。Fuks (2009: 2) は上記に先立つ論考で、このメタファーが医療の言説においてあまりに身近でありふれているために、その軍事上の由来や意義が忘れられかけていることを指摘している。

- (6) The war metaphor is so familiar and commonplace in our medical rhetoric that we easily lose sight

of its militaristic origins and significance.

このメタファーは領域の広範さゆえ、マスターメタファーリストには、以下のような下位範疇の記述が見られる。モト領域の成員としては「敵と味方」「武器」「戦場」「交戦のプロセスと勝敗」が挙げられているが、Coulehan (op. cit.) の諸例とは異なり、医師は患者側のカテゴリー成員となっている。

- TREATING ILLNESS IS FIGHTING A WAR (病気の治療を戦争に見立てる)
 - THE DISEASE IS AN ENEMY (病気を敵に見立てる)
 - THE BODY IS A BATTLEGROUND (人体を戦場に見立てる)
 - The body is not immune to invasion. (その人の体は侵襲に免疫がない。)
 - INFECTION IS AN ATTACK BY THE DISEASE (感染を敵の攻撃に見立てる)
 - His body was under siege by AIDS. (彼の身体はエイズに包囲された。)
 - MEDICINE IS A WEAPON (薬品を武器に見立てる)
 - The so-called cure is no magic bullet. (いわゆる治癒とは魔弾などではない。)
 - MEDICAL PROCEDURES ARE ATTACKS BY THE PATIENT (医療行為を患者側による攻撃に見立てる)
 - The doctors tried to wipe out the infection. (医師たちは感染を一掃しようと試みた。)
 - THE IMMUNE SYSTEM IS A DEFENSE (免疫系を防衛に見立てる)
 - The body normally has its own defenses. (身体は通常、独自の防御システムを有する。)
 - BEING CURED OF THE DISEASE IS WINNING THE WAR (寛解を戦争の勝利に見立てる)³⁾
 - Beating measles takes patience. (風邪をやっつけるには忍耐が要る。)
 - DYING IS BEING DEFEATED (死を敗北に見立てる)⁴⁾
 - The patient finally gave up the battle. (その患者はついに病との闘いに屈した。)

このメタファーが成立する背景として Dubos (1987:2833) は、治療とは逆の行為であるが、ヨーロッパ人がアメリカ先住民族に対して行った天然痘の意図的な拡散を事例に、西欧における神と異教徒の闘争という神学フレームの存在を論じている。

- (7) In fact the Europeans soon became aware of the fact that smallpox was one of their most effective weapons against the Indians and they did not hesitate to spread the infection intentionally by means of contaminated blankets, always on the pretext that it helped to destroy the enemies of the faith. God is always on the side of the strong battalions, even when they are made up of microbes.

上記のフレームから神学の要素を除くと、戦争メタファーの動機づけとしては、限定された場(人体→戦場)で自らに苦痛を与える存在(病気・病原菌→敵)に対して特定的手段(療法・薬品→武器)を用いるという、戦争-医療の両カテゴリーにおける特性的な類似性が想起可能である。しかし筆者はそれに加え、ここに両領域間のメトニミーおよびシネクドキに基づく関係性も扶翼していることを主張する。

戦争と医療とは時間軸で隣接し、原因で結果を示す。いかなる戦争においても、従事した人間の定めは戦死か、傷を負うか、無事の帰還かのいずれかである。この連想が民俗的に共有されるため、戦争と関わらない場合であっても、医療行為は戦闘行為の連想を受けやすい。また医療の下位カテゴリーとして民間医療に対する「戦傷医療 (Combat Casualty Care)」があり、ここには医療と戦場の間の包摂関係が見られる。

タクソノミーに基づくやや極端な言明を行なえば、戦争と医療は片方がもう片方を見立てるといよりも同一の概念であり、異なる側面をプロファイルした帰結であるという推論も成立する。戦争は、独立した政治体が組織した軍事力による実質的な武装対立と定義されるが、人類史とは本質的に壮大な闘争 (struggle) の過程である。その渦中において、他部族や猛獣など可視化できる存在に対しては「戦争」というフレームでの攻防が、また痛みや不快感など原因が可視化できない存在に対しては「病気」というフレームでの攻防が、それぞれ言語化されてきたとも考えられる。人間の集団が国家の様相を示すようになり、それに伴って戦争が構造化されたために戦争の独立した概念が担保されたものの、それ以前には他部族や猛獣の襲撃を「防ぐ」ことと同様、疾病や怪我から身を「守る」ことはメタファーではなく、字義通りの (literal) 実態であった。現代においてさえ、人間同士あるいは人間対環境のインタラクションの多くは「裁判の勝訴」「国会の論戦」など、何らかの勝敗を伴う闘争である。よって筆者は、「風邪から身を守る」といった死喩も含め、医学および医療のテキストにおける戦争メタファーの採用は、メトニミーおよびシネクドキの支援も受けた、人間の認識にとっての必然であると主張する。

3. 戦争メタファーから軍事メタファーへ

3.1. プレ病理学の時代

病理学が発展する以前、人間は病気を引き起こす外的な要因に関して、科学知識に基づく合理的な説明を持たなかった。しかしそれを求める認知的欲求ゆえ、古代から中世にかけては、人に心身の不調をもたらす原因に対する可視化が試みられ、新村 (1998:62) が (8) で述べるように、それは何故人知を超えた存在が人間の体に悪い影響を与えた結果と説明されてきた。人間はそれらを退治しようとはせず、魔除け・お払いといった語が示すように、それらから逃げたりそれを避けたりする消極的な策を取った。

あるいは病気は自らの前世や祖先の悪行が祟ったもの、いわば神罰や仏罰が病気の外因であると捉える見方も存した。ただし当時の一場合によっては現在でもなお一人々は、これらの病因も方策もメタファーではなく、文字通りの事実と見なしていた。そしてこの場合も原因は自分の身の外にあるため、人間が積極的な治療に踏み込むことは難しかった。

- (8) 病と言うものを考えてみると、古い時代ほどその捉え方は多元的であった。病を神仏による罰であるとか、人による呪詛であるとか、あるいは疫神の仕業、死霊や鬼霊などの憑依であるとするなど、病人を取り巻いている神仏を含めた他者との関係の不調和に、その因を求める場合もあれば、身体内のバランスの失調を病因とする東洋医学の立場もあった。

3.2. 索敵と攻撃の時代

近世から近代にかけて医学は臨床と観察を重んじる経験科学となり、19世紀の後期に病原菌で

ある微生物が発見されると、微生物が生物の体内に入り込んで増殖することで感染症になること、それぞれの感染症にはそれに応じた固有の細菌があること、そして血清やワクチンなど免疫抗体の投与によって患者が寛解に向かうことが明らかになり、特異的原因論が病因の主流となった。Institute of Medicine of the National Academies (2006:3) はその帰結を戦争メタファーによって、以下のように描写している。

(9) This pathogen-centered understanding attributed disease entirely to the actions of “invading” microorganisms, thereby drawing the lines of battle between “them” and “us”.

ここに至って人間は病を引き起こす相手が何かを索敵し、同時にワクチンという武器を得た。医療という戦争の火蓋は切られ、本格的な軍事メタファー (military/martial metaphor) が登場した⁵⁾。医学史では、Dubos (op. cit.,1932) が当時の経緯を以下のように表現している。

(10) Whatever the nature of the disease, the most important task - so at least is the well-nigh universal belief is to discover some magic bullet capable of reaching and destroying the responsible demon within the body of the patient.

上記は2.3で触れた軍事フレームのメディカル・メタファーに加えて神学のメタファー “demon” も引き続き採用されており、近代医学の黎明期を活写した言語表現として興味深い。この言説は認知言語学の観点からは、医療行為の構造が軍事フレームで活性化され、さらに時間軸が加わって図2のようにスクリプト化したものと解釈できる。

罹患と治療のプロセス	経過	写像	軍事メタファーのスクリプト	経過
微生物による感染	↓	→	敵による自領土への侵襲	↓
特有の症状の発露	↓	→	敵による占領と荒廃	↓
薬品投与による治療	↓	→	味方による武器使用	↓
寛解		→	敵の撲滅・退散	

図2 軍事メタファーのスクリプト構造

注目すべきは、戦争と医療という両領域間の相似を考慮に入れても、細菌学と治療学の知見が軍事メタファーを呼び込んだスピードが極めて速いことである。これは、両者が同時代の歴史の後押しを受けて相互に影響を与えあったがゆえと考えられる。

新しい医学が発展を見た19世紀後半は、帝国主義による覇権の時代である。それを推進した諸国家にあっては、医療・軍事の両政策が相互に影響しあいながら興起し、同時代の言語に影響を与えた。1.3で述べた戦場医療の登場や、細菌学の応用である生物兵器の開発はその実例である。Montgomery (1996:181-182) では、予防接種の開祖であるパストゥール自身が、普仏戦争の影響から著作に軍事フレームによるメディカル・メタファーを採用するに至った経緯が述べられている。

(11) At this point of his work, Pasteur, like most French intellectuals, had a traumatic encounter. He found himself overwhelmed by the defeat of France to Prussia in the war of 1870. This demeaning capitulation, secured by the Germans in only 7 weeks, came at the point in his own career, when he had just finished work on the diseases of the silkworms and was beginning to think about contagious illness in general. [...] Pasteur seems to have viewed the diseased body and the “enfeebled” nation in very much the same way. While it is difficult to discern which of these two models of discourse came first in his work and writing, it seems clear that they coexisted by this time.

特に日本は遅れて帝国主義国家に加わり、社会、産業、教育等の諸制度が富国強兵という国家的目標の下で短期間のうちに確立されたため、敵の脅威と闘ってこれを破るという理想認知モデル (Lakoff 1987) に近い軍事スクリプトが、医学および医学教育に対して影響を与えたと考えられる (川村 2006 : 56)。

(12) この病気観は「戦争」のメタファーによって彩られていたのである。コッホによる結核菌の発見は一八八二年であり、世界は帝国主義的侵略戦争へと邁進していた。近代日本の形成のために西洋医学が採用され、それが国家的な制度として確立されたのは、いわば必然的だったといえよう。

また大塚 (2011) は、教科としての体育が富国強兵のために兵士育成としての役割を担った経緯とその内容を論じているが、これは教育が軍事フレームに依拠してコースデザインを行った例であり、類似の構造は公衆衛生など近接分野でも観察される。

その後、二度の大戦を経た世界は 21 世紀を迎え、人類史的に見れば紛争・戦争の減少は達成された。しかし現在もなお、医学を初め戦争をモト領域とするメタファーは、言語心理的な残滓として私たちに根づいている。私たちは例えば人口問題と「戦い」、貧困を「撲滅」することを目標に掲げ、それらに「勝利を収める」べく日々「奮闘」する。いわば、気分としての軍事フレームは、常に私たちと共にあり、その認識に影響を与えている。

3.3. 軍事メタファーの問題点

医療を軍事メタファーで見立てることの問題は、大別すると以下の 2 点である。

第一に、工学メタファー同様、軍事メタファーのフレームで医学を考えることにより、医療コミュニケーションにおいて、患者の声が医師に届きにくくなることである。軍事メタファーのアナロジーでは、患者は人ではなく、医療行為という戦いが行われる戦場に見立てられる。その結果、患者の自覚症状を聞くことや、その立場に立って治療を進めることは、おざなりになるか無視されるかに留まり、医師への信頼が損なわれる。この問題点に関し、Fuks (op. cit.) は現場の医師の立場から、以下のような批判を行なっている。

(13) The mindset endangered by this discourse of war renders the patient as a battlefield upon which the doctor-combatant defeats the arch-enemy, disease. The reified disease becomes the object of the physician's attention, displacing the patient as the interlocuter in the doctor-patient relationship.

第二に、戦争のフレームワークが医療コミュニケーションのみならず、実際の医療行為を決定づける点である。Lakoff, Espenson & Schwartz (op. cit.) は、メディカル・メタファーにおける軍事フレームを支える知識構造として「戦争がすべての戦略と手段を正当化する点」を挙げている。すなわち、この知識構造戦争の目的は専一に敵の殲滅にあり、その達成のために現場の指揮官には無制限の権威が付与されることになる。Hillmer (2007:29) は、このフレームで行われる医療行為が過度に変じる危険を以下のように述べている。

- (14) The ILLNESS-IS-WARFARE metaphor certainly focuses on the violent and aggressive aspects of a disease. The effects of structuring illness in terms of war have therefore been criticized for leading to encouraging strong drugs and surgery without heed to side effects, focusing attention on disease rather than the patient, and leading to unnecessary frightening images.

戦争の方法論を応用した治療行為の例として、「先制攻撃的治療 (pre-emptive therapy)」があるが、Malm (2016) は癌の医療現場において、これらの過度な診断ならびに治療が問題を引き起こしている点を非議している。

軍事メタファーは医療倫理における大きな問題と見なされており、2006年には人間と微生物の関係を軍事メタファーで見立てることの危険性に関する大規模なワークショップが開催されている。また、医療行為や公衆衛生、ひいては社会政策を軍事メタファーで語ることの危険性は、Sontag (2001) の考察により膾炙している。

3.4. 代替メタファーとその限界

軍事メタファーへの批判は、その使用を止めた場合の代替となるメタファーは何かという議論を導く。Bleakley (op. cit.) では、代替メタファーとして「医療行為を旅に見立てる (MEDICINE IS TRAVEL)」「医療行為を創造に見立てる (MEDICINE IS CREATION)」など多くの代替メタファーが中国、サブサハラなどで用いられてきたことが紹介されている。また日本においても、患者に優しい社会システムの構築を医療で実現するという目標の下、長谷川・藤谷 (2012) による「医療行為を樹木の育成に見立てる (MEDICINE IS GROWING UP A TREE) が、「信頼の木」の名称で提唱されている。

上記の代替メタファーがその正当性の根拠として挙げるのは、Nie et al (2016) が論じるように、人の死を構造的に内包する軍事行動が、病人を治す医療行為とは本質的に相容れない点である。

- (15) However, the widespread use of these metaphors in medicine is ironic given that one of medicine's primary goals has always been to save lives and to treat injuries caused by acts of collective violence.

その論拠にテクニカルな破綻はないものの、それを知悉している医師を初めとする医療従事者の間では、今日もなお軍事フレームによって医療は規定され、選択され、言語化されている。その理由の一つとして、Bleakley (op. cit.,1585) は、それらのメタファーが軍隊にも似た医学界で支配的地位にいる医師たちの権力維持に供していることを皮相的に紹介している。

- (16) Martial metaphors have gained a purchase in medicine and surgery, and continue to be used by doctors and surgeons, possibly because they serve a purpose in maintaining the power of such doctors and surgeons at the apex of a militaristic hierarchy, where a meritocracy is misread as an autocracy.

しかし筆者は軍事メタファーが強力である理由を、業界構造やその体質といった狭い動機以上に、1.3で論じたように絶滅することなく環境に適応しようとした人間の営為そのものが、戦争を含む闘争という側面を持っていたことに求める。個人による生命維持とは人間という種の維持の下位範疇であり、その多くは何らかの方法による外敵の排除を必然的に伴う。疾病もまた生命を脅かす現象である以上、それに対峙した場合に戦いや軍事のフレームを採用することは、人間という種に内在する固有性 (instinct) に拠る。

例えば戦争メタファーに対する最大の啓蒙的批判 (the most thought-provoking criticism) を展開した Sontag (op. cit.) でさえ、その追放を目指す言説においては “by calling for the complete *retreat* of military metaphor” と、軍事フレームから逃れ得ないままに議論を進めている。留意すべきは彼女の主張とそれを論じる言語的手段との矛盾ではなく、この見えにくいメタファーがいかに人間の基本的な世界観を形成してきたかの再認識である。

戦争や軍事のフレームに基づくメタファーが人間の必然的な認識の帰結であるならば、私たちはその固有性を所与として、効果志向の方策 (effects-oriented policies) を考えるしかない。よって筆者は代替メタファーと並行しつつ、軍事フレームに依拠したまま、即座に戦闘行為に至らない現状維持の努力、すなわち「非戦」をメディカル・メタファーとしてプロファイルすることを主張する。これは複数のメタファーの共存を主張する点で、Parsi (2016: 2) に近い。

- (17) Allowing a certain level of pluralism with the kind of metaphors we use is appropriate. What’s troubling is when one metaphor (in this case, the military metaphor) becomes the only or dominant way we interpret various illnesses.

4. 貝原益軒の非戦メタファー

4.1. 貝原における戦のフレーム

筆者が主張する非戦メタファーの先駆的な考察は、17-18世紀の本草学者である貝原益軒の『養生訓』に見られる⁶⁾。最初に、貝原が戦のフレームで医療を考察している例から考える。

- (18) 良医の薬を用るは臨機応変とて、病人の寒熱虚実の機にのぞみ、其時の変に応じて宜 (ぎ) に従ふ。必 (かならず) 一法に拘はらず。たとへば、善く戦ふ良将の、敵に臨んで変に応ずるが如し。かねてより、その法を定めがたし。(巻第七より。下線部は筆者による、以下同様。)

「たとへば～如し」のマーカ―が示す通り、この記述はシミリであるが、敢えてメタファーでの記述を試みると、

- 医師を将で見立てる (A DOCTOR IS A WARRIOR CAPTAIN)
- 投薬を戦闘で見立てる (DOSAGE IS A BATTLE)

が観察可能である。前者は Coulehan (op. cit.) の提示したものと等しく、後者は、投薬が医療行為の一部であるために、2.3 で挙げたマスターメタファー「病気の治療を戦争に見立てる (TREATING ILLNESS IS FIGHTING A WAR)」と、タクソノミーに基づく全体-部分の関係にある。

『養生訓』の刊行は1712年であり、近世における最後の合戦である大阪ノ陣からおよそ百年が経過している。貝原自身には戦乱の記憶はないものの、父親を初めとする年長の近親者らは戦乱の最後の時代を経験している。また貝原が生きた時代は太平の世とはいえ、公儀たる徳川幕府は原理的に軍事政権の性格を有していた。それゆえ福岡藩医であった貝原にとって戦とは顕然たる環境であり、治療の過程である投薬が戦で見立てられることは必然であったと推測できる。

4.2. 貝原の防戦メタファー

次に、貝原が戦のフレームを維持しつつ、防御・防衛のメタファーを用いてその重要性を説いた例を挙げる。

(19) 人の身は金石にあらず。やぶれやすし。況 (いわん) や内外に大敵をうくる事、かくの如 (ごとく) にして、内の慎 (つつしみ)、外の防 (ふせぎ) なくしては、多くの敵にかちがたし。至りてあやふきかな。此故に人々長命をたもちがたし。用心きびしくして、つねに内外の敵を防ぐ計策なくむばあるべからず。敵にかたざれば、必 (かならず) せめ亡ぼされて身を失ふ。内外の敵にかちて、身をたもつも、其術をしりて能 (よく) ふせぐによれり。生れ付 (つき) たる気つよけれど、術をしらざれば身を守りがたし。たとへば武将の勇あれども、知なくして兵の道をしらざれば、敵にかちがたきごとし。(巻第二十より)

最後の一文は前例同様のシミリを用いているものの、上記では段落のほぼすべてが軍事フレームに基づくメタファーから成立している。3.1 の例に追加するメディカル・メタファーは以下の通りである。

- 病因を敵で見立てる (ETIOLOGY IS AN ENEMY)
- 治癒を勝利で見立てる (HEALING IS VICTORY)
- 死を敗北で見立てる (DEATH IS DEFEAT)

感染症を引き起こす微生物が未発見であった時代に、貝原が内外の敵という見立てを用いて、現代の病理学における外因・内因の区別に近い概念を示したのは卓見である。現在の軍事フレームのメタファーでは細菌やウイルスを外敵と扱うが、貝原においては外因に写像される外敵とは「風・寒・暑・湿」の四点である。

ここで貝原が武器使用としての投薬以上に、身の慎みによる「防衛」を薦めている点は瞩目に値する。上記テキストと以下を併せ読むと、現代医学における過度な薬品への依拠とは異なる貝原の姿勢はより鮮明となる。

(20) いはんや攻撃のあらくつよき薬は、病に**応ぜざれば**、大に元気をへらす。此故に病なき時は、只穀肉を以 (もって) やしなふべし。(巻第七より)

4.3. 貝原の非戦メタファー

さらに貝原が健康と病気という単純な二分法を止め、未病の概念を摂取しつつ、治療という戦闘を積極的には行わない「非戦」に言及した例を示す。⁷⁾

(21) 養生の道も亦かくの如くすべし。心の内、わづかに一念の上に力を用て、病のいまだおこらざる時、かちやすき慾にかてば病おこらず。良將の戦はずして勝やすきにかつが如し。是上策なり。是未病を治するの道なり。(巻第一より)

貝原はこの項で、内敵に見立てられた病理学上の内因を「欲」であるとしている。すなわち敵は自己の内に存するという思想であり、ここに自らの内に形成された生活習慣が成人病を引き起こすという現代医学の観察との親和性を見出すのは、難しいことではない。

ただし、これを以って近世の日本医学が現代の西洋医学と思想的に拮抗していたと見なすのは早計である。貝原の言説は、当時の武家における倫理観であった士道の影響の可能性、微生物という明確な外因が未発見であったがゆえの内因への過度な傾斜、さらには『黄帝内経』以来の漢方医学思想の影響など、幅広い観点から考察されるべきである。

とはいえ、3.4 で論じた徹底攻撃・殲滅・根絶やしなど西洋医学の軍事フレームを用いたメディカル・メタファーで戦争の負の側面を患者に負わせることの正当化と比すれば、戦の記憶があり、かつ戦のない世を生きた貝原が、結果としての言語的非戦行為を行い、かつそれが現代の予防重視の医療観とも整合性を持っていることには画然たる意義がある。本来は侵入する意思を何ら持たないウィルスの活動を「侵襲 (invasion)」と呼称し、それに対する先制攻撃的な医療観すら存在する現代において、治療には供さないものの、およそ 300 年前に書かれた近世の養生指南書が示すメディカル・メタファーが現代の医療観に示唆するところは大きい。

5. おわりに

本論文における筆者の学術上の主張は、以下の 2 点である。

1. 軍事フレームに依拠したメディカル・メタファーの成立動機には、それを支える特性的な類似のみならず、原因→結果のメトニミーに基づく隣接的な関係性、類一種のシネクドキに基づく包摂的な関係性もそれを扶翼する。
2. 軍事フレームにまったく依拠せずにメディカル・メタファーを考えることが困難である以上、私たちはそのフレームを排除することなく、非戦・防戦をプロファイルしたメタファーも活用すべきである。

日本におけるメディカル・メタファー研究は、英語圏における研究の隆盛と比して、ほぼ未開拓の沃野である。その研究は長期的に、私たちの医療観の涵養ならびに医療従事者と患者との円滑な医療コミュニケーションに供する。

注

- 1) この種のメタファーに学術用語としての統一はなく、本分野の研究においては metaphors in medical texts, metaphors in medicine などが並行的に用いられている。認知言語学において metaphor の訳語が「隠喩」ではなく「メタファー」が採用されている現状を踏まえ、かつ訳語が簡便であることから、本稿では「メディカル・メタファー」を採用する。
- 2) a fundamental perspective or viewpoint based on a supposition of similarity of form between mental concepts and external objects which though not factually supportable determines the manner in which an individual structures his knowledge. (Merriam-Webster Dictionary 1961)
- 3-4) 公開されている Lakoff, Espenson & Schwartz (op. cit.) では、上記 7、8 においてモト領域とサキ領域の順が異なる誤記となっており (Winning the War is Being Cured of the Disease, Being Defeated is Dying)、Schwartz 氏は筆者との私信でそれを認めているので、本稿では訂正に応じた記述としている。
- 5) メディカル・メタファーにおける「戦争 (に関する)」は研究者によって war, military, martial などが恣意的に当てられており、学術上の統一は図られていない。本稿では病理学の発達以降の「戦争メタファー (war metaphor)」が、敵・武器などのカテゴリー成員が揃ってより構造化された「軍事メタファー (martial metaphor)」に変化したと捉え、時代的な区分によって両語を区別する。
- 6) 引用した原文は中央公論社版に拠る。
- 7) 日本未病システム学会では「自覚症状はないが検査では異常がある状態」「自覚症状はあるが検査では異常がない状態」を合わせて「未病」としている。また同学会は未病の祖述に『養生訓』と後漢の『黄帝内経』を挙げている。

参考文献

- 長谷川敏彦・藤谷克己 (2009). 『信頼の木』「第 1 回医療コミュニケーション研究会発表資料」mimeographed.
- 貝原益軒 (著)・松田道雄 (訳) (1980). 『養生訓』東京：中央公論社.
- 川村邦光 (2006). 『幻視する近代空間—迷信・病気・座敷牢、あるいは歴史の記憶』東京：青弓社
- 大塚正美 (2011). 「体育の歴史と役割」『城西国際大学紀要第 19 巻 1 号』137-145.
- 瀬戸賢一 (1995). 『メタファー思考』東京：講談社.
- 新村拓 (1998). 『医療化社会の文化誌 生き切ること・死に切ること』東京：法政大学出版局.
- Académie Française. (1762). *Dictionnaire de l'Académie française: 2 tomes*. Paris: L'académie Française, 65.
- Bleakley, A. (2017). *Thinking with metaphors in medicine: The state of the art*. London: Routledge.
- Coulehen, J. (2003). Metaphor and medicine: Narrative in clinical practice, *Yale Journal Biology and Medicine*, 76, 87-95.
- Diekema, D. S. (1989). Metaphors, medicine, and morals, *Soundings: An Interdisciplinary Journal*, Vol.72, No. 1, 17-24.
- Dubos, R. (1987). *Mirage of health: Utopias, progress and biological change*, New Brunswick: Rutgers University Press.
- Fuks, A. (2009). The military metaphors of modern medicine. *8th Global Conference: Making Sense of Health, Illness, and Disease*. Oxford: University of Oxford.
http://www.inter-disciplinary.net/wp-content/uploads/2009/06/hid_fuks.pdf.
- Harley, DN. (1993). Medical metaphors in English moral theology, 1560-1660. *Journal of the History of Medicine and Allied Sciences* (48), 396-435.
- Hillmer, I. (2007). The way we think about diseases: “The immune defense” - Comparing illness to war. *NAWA Journal of Language and Communication*, Volume 1. Issue 1, 22.
- Hodgkin, P. (1985). Medicine Is War: and other medical metaphors. *British Medical Journal*, 291, 21-28.
- Institute of Medicine of the National Academies. (2003). *Ending the war metaphor The changing agenda for unraveling the host-microbe relationship*. Washington, DC: The National Academies Press.
- Lakoff, G. (1987). *Cognitive models and prototype theory*. In Ulric Neisser (Ed.) *Concepts and conceptual development: ecological and intellectual factors in categorization*. New York: Cambridge University Press, 63-100.
- Lakoff, G. (1997). *Moral politics: What conservatives know that liberals don't*. Chicago: University of Chicago Press.

- Lakoff, G., Espensen, J. & Schwartz, A. (1991). *Master metaphor list-Second draft copy*.
<http://araw.mede.uic.edu/~alansz/metaphor/METAPHORLIST.pdf>
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lupton, D. (2012). *Medicine as culture: Illness, disease and the body*. Los Angeles Sage Publications.
- Malm, H. (2016). Military metaphors and their contribution to the problems of overdiagnosis and overtreatment in the “war” against the cancer. *The American Journal of Bioethics* (16), 19-21.
- Montgomery, S. L. (1996). *The scientific voice*. New York: Guilford.
- Nie, JB (1996). The physician as general. *Journal of American Medical Association*, 1996 (13).
- Nie, JB et al. (2016). Healing without waging war: Beyond military metaphors in medicine and HIV cure research. *American Journal of Bioethics*, 16 (10), 3-11.
- Parsi, K. (2016). War metaphors in health care: What are they good for? *The American Journal of Bioethics*, 16 (10), 1-2.
- Slobod, D. and Fuks, A. (2012). Military metaphors and friendly fire. *Canadian Medical Association Journal*, 184 (1), 144.
- Sontag, S. (2001). *Illness as metaphor and Aids and its metaphors*. London: Picador.

(あらかわ ようへい 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授)

Martial Metaphors in Medical Texts

ARAKAWA Yohey

KEYWORDS: metaphors, medicine, war, martial frame, pacifism

Predominant metaphors in medical texts are exposed, beginning with 18th century views. Their analyses reveal two arguments by the author. First, medical metaphors in martial frames are motivated not only by similarities between medicine and war, but also by their temporal contiguity and their relations based on taxonomy. Given this assumption, human beings cannot avoid using such durable martial metaphors, although it is ironic that war, the source domain, inevitably takes human lives while medicine, the target domain, sets its goal to save lives. Second, we should utilize metaphors of pacifism, keeping our martial frame alive, with other alternative metaphors. In their wake, the author introduces pioneering discourses by Ekiken Kaibara, an early modern naturalist in Japan, and examines several metaphors of pacifism in his exemplary work “Yojokun”.